

L. v. ベートーヴェンの「シンフォニック」な四重奏曲、作品 59 における音域の拡大

——革新的音響および楽曲構成の要素としてのその二重の機能——

丸山瑤子

従来、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲集 Op. 59 (1806 年完成) は、様式的に Op. 18 (1800 年完成) からかけ離れており、その規模の拡大と管弦楽的音響ゆえに「シンフォニック」な四重奏曲と評されてきた。しかし実際は、両作品を「シンフォニック」な性質に関して綿密に比較した研究はない。

シンフォニックな性質に関する要素のうち、音域は、その扱われ方が二作品間で著しく変化しており、そして Op. 59 では以下の通り、音域が音響と楽曲構造両面で——特にシンフォニックな特徴とされる規模の拡大と管弦楽的音響に関して——様々に活用されているために、特に注目される。

Op. 59 では広範な音域が Op. 18 よりも頻繁かつ持続的に用いられているのに加え、しばしば音程が大きな振れ幅で変動することで、拡大時の音程の幅広さが相対的に強調されている。以上により、Op. 59 全体が高低幅の広い響きに特徴づけられている。また音域の拡大が管弦楽曲におけるのと似た形で楽曲内に配置されることで、随所に管弦楽に典型的な音響展開が生まれている。Op. 59 では、このような音域設定の工夫により、従来の弦楽四重奏の限界を超えた管弦楽的音響がもたらされている。

楽曲構造面では広い音域が他の要素と組み合わせられ「期待と裏切りのプロセス」が成立している。ここではカデンツで音域を拡大する慣習的書法ゆえに終止に対する期待が高められるにも拘わらず、明確な終止が拒否される。それにより細かい部分の完結性が希薄化し、安定的な終止が先送りされる。その結果、最終的な終止へ向かう音楽の進展が促される。同時に細かい部分同士がより大きな形式的統一へと纏められ、これが規模の拡大を支えている。また期待の裏切りを境に極端な音域の拡大が楽曲内に何度も反復可能となることで音楽の力動性が保障されている。ここで広範な音域はプロセスの効果を支えると同時に音響面でも力強い音量と管弦楽的響きの保持という独自の機能を果たす。